

知らざあ言って聞かせやしょう：事務局長リニューアル奮闘記

市井 吉興

(国際平和ミュージアム副館長・第2期リニューアル事務局長)



「立命館大学国際平和ミュージアムだより」の担当職員さんから「リニューアル開館に寄せての想いを綴ってください」との依頼を受け、何を書こうかと、これまで自分が書いたリニューアル関連の資料を見ながら、検討しました。

そのとき、たくさんの資料のなかから、略称「ミュージアムだより」の通巻83号（2021年3月15日発行）に私が書いた「知らないことばかりの国際平和ミュージアム」という記事が目飛び込んできました。

そこには、私が学生時代、文学部3回生のときにミュージアムは開館したけれども、「アカデミア立命21」という施設は、そこに設置されている国際平和ミュージアムよりも、学生を対象とした「セミナーハウス」という認識しかなく、地階の常設展の見学に行ったかもしれないが、その記憶はないと書かれていました。

書いたのは私なのですが、これからリニューアルが本格化していくなかで、事務局長としての意気込みを述べた記事に、こんなことを書かっていたとは。いやはや、面目次第もないという感じです。

さて、今次リニューアルは2018年に「国際平和ミュージアム第2期リニューアル基本構想検討委員会」を設置することから、本格的な活動が始まりました。しかし、ここまでの道のりは平坦なものではありませんでした。

たとえば、今次リニューアルを象徴するものとして、地階の壁面を縦横無尽に活用し、あたかも「歴史絵巻」とも称せる年表があります。この年表は、日本の近現代史をグローバルな視点から描き直すという壮大な試みとなっていますが、教員、研究者、学芸員、スタッフが丸となり、近年の研究動向や新たな展示手法を盛り込むとともに、設立以来掲げるミュージアムの理念を表現しています。

当然のことながら、壮大な試みゆえに議論は熱くなりました。しかし、振り返りますと、熱い議論は立命館大学が教学理念として掲

げる「平和と民主主義」のリアルな実践といえるかもしれません。改めて確認しておきたいのですが、国際平和ミュージアムが目指すことは、教学理念「平和と民主主義」の具現化として、現代的課題を認識し、過去と未来に向けての対話を通じて、正解のない問いと向き合い、平和創造の主体者となる世界市民をはぐむ学びの場を形成することにあります。

リニューアル後、戦後80年を迎えます。その節目において、国際平和ミュージアムに求められるものとはなんでしょうか。まず、開設より重視してきた平和教育の開発と普及、研究活動の蓄積を基礎に、平和教育研究センターと共同して、未来の平和な社会の創造に道筋を示すことにあります。さらに、大学附設の平和博物館である国際平和ミュージアムは、平和創造に関する実践的な取り組みとの協同のさらなる開拓にあります。

まさに、第2期リニューアルとは、このような求めに応じるための強力な知的基盤の再整備であったと言っても過言ではありません。また、私たちが忘れてはならないのは、リニューアル後も、リニューアルの渦中においてなされた熱い議論、つまり、立命館大学が教学理念として掲げる「平和と民主主義」のリアルな実践を続けることです。それが形骸化し、無くなってしまえば、今次リニューアルの意義、さらには国際平和ミュージアムの存在意義は失われてしまうのではないのでしょうか。

全学の協力を得たリニューアル事業であり、晴れがましいリニューアルオープンを控えた時期に、事務局長が水を差すようなことを言うことを訝る方もいらっしゃるでしょう。しかし、先にも述べたように、平坦な道のりではなかったリニューアル事業であり、その最前線にいた者として、めでたかろうが何だろろうが、言っておかねばならぬこともあるということをご理解いただきたく存じます。



戦争の記憶を分かち合う ——リニューアル後の「個人の体験」の展示について

今回のリニューアルでは、今までにない新たな展示アプローチがとられています。「個人の体験」の展示です。旧展示では、「総合的」な展示解説を探究する必要性からか、特定の個人の体験というものを展示内ではほとんど取り上げてきませんでした。しかし、1992年の開館から30年を経た現在、来館者が戦争体験を語り継いできた人たちと出会う機会が本格的に失われつつあります。戦争体験とその反省のもとに生み出された「戦後」の価値が自明ではなくなりつつあるなか、今回のリニューアルでは、「戦争の記憶を共有するミュージアム」というコンセプトを掲げて、新たに個人の体験を展示に組み入れることとしました。来館者が、戦争の時代を生きた人びとに何があったのかを想像し、考えるきっかけをつくることから、ふたたび展示を始める必要があると考えたためです。

「個人の体験」と一口に言っても、当然ながらそこにはさまざまな個人の体験があります。今回のリニューアルでは、とりわけこれまで大きな歴史叙述からはこぼれ落ちていった人びとの経験——たとえば、障害をもつ子どもの空襲体験や朝鮮人の被爆体験、日系アメリカ人の戦争体験など——に光を当てながら、約100人にもおよぶ「普通の人びと」の声を展示全体に散りばめました。このような個人の体験の展示は、近年の歴史学におけるエゴ・ドキュメントやオーラル・ヒストリーへの関心の高まりとも共鳴しながら、研究者や学芸員、そしてスタッフである大学院生や留学生がともに「いま誰のどのような声を届けるべきか」「来館者の心に響く言葉とは何か」などと検討を重ねてきた結果でもありました。



証言する鈴木良雄さん（2004年、芹沢昇雄さん撮影）

個人の体験の展示のために、今回ミュージアムが新たに取入れたものが証言映像の展示です。リニューアルされた展示では、たとえば元日本兵の鈴木良雄さん（埼玉県・1916年生まれ）の「私の罪行」と題された証言映像に触れることができます。1941年より5年間、日中戦争に従軍した鈴木さんは、中国山東省の集落で初めて民家を焼き払った日のことを、戦後繰り返し語ってこられました。その日、鈴木さんは民家のなかに若い母親と赤ちゃんがいることを知りながら火をつけました。そのことが戦争で自分が壊れていくきっかけになったと鈴木さんは言います。「一度やってしまうと、ど



来館者は一人ひとりの戦争体験と向き合える



新設された証言映像の展示

ういうわけだか人間の心境というものは、次から次へと悪いことがしたくなっちゃうんですね。映像は、そうした鈴木さんの言葉だけでなく、それらを語る表情や身振り、そして沈黙の瞬間など、たくさんの言葉にならないものを伝えてくれています。

鈴木さんの映像を撮影したのが芹沢昇雄さんです。2022年7月、埼玉県川越市の中帰連平和記念館に所蔵されている膨大な量の元日本兵たちの証言映像を調査させてもらいました。この3日間の調査にご協力くださったのが、同館事務局長の芹沢さんでした。かつて芹沢さんは鈴木さんの証言活動には必ずと言ってよいほど同行し、鈴木さんが若い世代を前に証言される姿などをホームビデオ用のカメラで撮影して長年保管されてきました。いま来館者が（そして私自身もまた）鈴木さんと映像を介して出会うことができるのも、こうした戦争体験者たちの「戦争の記憶」を後世に伝えるべく行動してきた人たちの介在があったことだと感じざるを得ません。

リニューアル後のミュージアムで、来館者がさまざまな個人と戦争の記憶を分かち合うことで——たとえそれらが断片的なものであったとしても——一人ひとりが自分たちのような「普通の人びと」にとっての戦争の意味を考えなおす機会となることを信じています。

（立命館大学国際平和ミュージアム・学芸員：大月 功雄）



五回の研修を終え、ガイドの間では「ファシリテート」とは実際に何をどうすることなのかまだ十分掴めず、不安の声が聞かれました。私も最後の現地研修に期待を寄せました。

久しぶりにミュージアムのエントランスに入り、「火の鳥」「わだつみ像」「むっちゃん」に出迎えられてリニューアルされた館内を巡りました。2階のピースコモンズとメディア資料室は明るく使いやすくなり、来館者にきっと喜ばれ活用されることと思います。

地階の展示室では、導入シアターの巨大スクリーンに圧倒されました。現代まで続く一本の年表とそれに対応するテーマ展示も興味深く、随所にある映像展示の中でも、私は植民地支配のときの『人々の移動』の3D地図が一番印象に残りました。それはまさに「帝国主義」とはどういうことを示す動く地図となっていて説得力があり、これを導入として見学者に考えてもらうのも一案かと思いました。

ただ、戦争終結と同時に戦後の冷戦・核軍拡競争の始まりの象徴ともいえる広島・長崎の原爆投下の原子雲の写真がなかったのは残念でした。被爆二世の私としては、このきのこ雲の下に数十万人の生活があったことを想像してほしい。子ども向けパンフの「戦争は何をもたらしたか？」を問いかけるページには是非入れて頂きたかったです。

現地研修では、ガイドの存在意義とは何かを改めて考えさせられました。中には従来通りガイドの説明に期待する見学者も来られると思います。実際、戦中・戦後の体験をされた先輩ガイドの方々のお話は興味深く、今後も貴重な存在であることは変わりません。これまでのガイドの良さも失うことなく新ミュージアムにどう生かせばよいでしょうか。

先日、初めてリニューアル後のガイドをしました。〈問いかけひろば〉で平和とは？の質問に『誰もが思っていることを言うこと』と入力していた中学生に理由を聞いてみると、「デスマスク（山本宣治）のところで説明を聞いて考えた。」と答えてくれました。そこでどのような対話（説明）があったのかわかりませんが、「ファシリテート」のあり方は、このように実際に資料を見て交わされる見学者とガイドとの対話の中で見えてくるのではないかと思います。

問いかけや対話による案内もこれまで多くのガイドが多少なりともやってきたことではありますが、新たな資料を深めるための研修は学芸員の方々を中心にこれからも必要となるでしょう。

今後のガイドが、より良いミュージアムを目指すオフィス、学芸員、ガイドの三者協働による創造的で楽しい活動となることを願っています。

（ボランティアガイド：鳥羽 洋子）

学生スタッフ 活動記録

ミュージアムガイドスタッフ編

立命館大学国際平和ミュージアムのリニューアルオープンに向けて、6月から約3か月間にわたりガイド研修が行われました。博物館におけるガイドは展示の補足説明を行う印象がありましたが、このガイド研修を通して、博物館に変化が訪れていること、そして、国際平和ミュージアムが新たな取組を始めようとしていることが分かりました。

君島館長が目指す新しい国際平和ミュージアムは、「対話型平和ミュージアム」です。美術館を中心に発展した「対話型鑑賞」という、美術作品をファシリテーターと見学者が議論をしながら鑑賞する方法を目指しつつ、平和を考える対話の場としての博物館に生まれ変わります。現地研修で見学した新しい展示室も、展示や来館者同士の対話を意識したものになっていました。また、展示の内容も戦争だけでなく、民主化運動や男女格差、差別、貧困など、今日まで続く平和問題にまで踏み込まれており、平和について総合的に考える場となっています。博物館が考えるきっかけを与えることが、来館者にどの様に作用していくのか楽しみです。

もちろん、新しい取組には困難もあります。国際平和ミュージアムの展示は完成しましたが、我々ガイドスタッフがどのように来館者と接していくのか、どのように考えるきっかけを与えるのか、などファシリテーターとしての役割については、現在も模索中です。ある程度定まった方法があった以前のガイドと異なり、これからその方法を見つけていく事となります。美術作品ではなく歴史資料でファシリテートを行う難しさもあります。また、ボランティアの方々は長年国際平和ミュージアムに関わっていますが、学生スタッフは全員がガイド未経験者です。



しかしだからこそ、新しいガイドはそれぞれが各々のやり方を持つ多様なものになるのではないのでしょうか。さらに、学生スタッフは個々人で異なった専門を持っています。それは新しいガイドの大きな強みであり、大学立の博物館である国際平和ミュージアムならではの強みでもあります。ボランティアガイドの方々が持つ知識や経験と、我々学生スタッフが持つ専門性が、国際平和ミュージアムを訪れる人々に考えるきっかけを与えられるはずで、まだまだ手探りの状態ではありますが、自分たちの手で新しい国際平和ミュージアムのガイドを作り上げていきたいと思ひます。

（学生スタッフ：山中 海音）

遊心雑記

平和と言えばハト？

安齋 育郎（国際平和ミュージアム名誉館長）

二昔ほど前、パラメディカル・スタッフや看護学生を対象に、病院管理学会向けの研究の一環として「連想語調査」を試みたことがあります。ある単語を「刺激語」として提示したときに頭の中に思い浮かぶ単語（連想語）を1分間と決めた決められた時間内に手当たり次第にメモしてもらう調査法で、連想語の数や内容から、刺激語に対する親密度や理解の内容を考察する調査方法です。

その後、この方法を「平和」を刺激語として立命館大学の学生や中学生らを対象に実施したことがありましたが、予想以上に上位を占めた連想語が「ハト」でした。「平和」と言えば「ハト」一実は、これは日本だけの現象ではありません。

旧約聖書の「創世記」のノア^{はこぶね}の方舟の話がその源流で、大洪水が収まった後ノアが放ったハトが「豊穡」の象徴であるオリーブの枝をくわえて戻ってきたことから、地上に平和が訪れたことを知るという逸話に由来します。

また、平和の象徴としてのハトは、ピカソの絵によって現代的な意味を獲得しました。1949年1月9日、ピカソは、パリの版画家フェルナン・ムルロのアトリエでモノクロのリトグラフ「ハト」を描きましたが、このハトの絵は、1949年の世界平和評議会のポスターに使われ、世界中に平和の象徴としてのハトのイメージを印象づけました。

そして、2022年、京都精華大学国際マンガ研究センター、京都国際マンガミュージアム、立命館大学国際平和ミュージアム、そして、安齋科学・平和事務所が協力して開催した「マンガ・パンデミックWeb展」。平和をテーマとする応募作品で多かったのが、やはり「ハト」でした。ハトは世界中のマンガ愛好家にとっても共通の平和の象徴であり続けているのです。

私は国境を超えた漫画作家たちの発想の普遍性を改めて感じるとともに、文化・芸術に関わる作家たちの間にはもっと多様な発想があるべきではないかという一抹の寂しさを感じたことでした。



Viiacheslav Kapreliants (ウクライナ) の作品。
軍人も平和を望んでいる。

ピースコモンズを新設しました！

2023年9月国際平和ミュージアムにピースコモンズを開設しました！
「みて・かんじて・かんがえた」ことを自由に語りあえる広場です。
「平和って何?」、「争いがなければ平和なの?」あなたが展示を見て感じたこと、考えたことをみんなで共有し、話し合ってみましょう。
国際平和メディア資料室の資料を利用した勉強もできます。
ぜひご活用ください！



立命館大学国際平和ミュージアムだより

 立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第31巻 第2号（通巻91号）2023年11月10日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL: 075-465-8151/FAX: 075-465-7899
<https://rwp-museum.jp> (HPが新しくなりました)




日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

今後、展示・イベントのご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム（075-465-7899）へ送信ください。